随分長い時間を占めた事と思う。学生時代は野球に，社会人としてはゴルフに熱中したが，典型的なスポーツマンであり，フェアプレーの精神を身につけていた。この精神は，単に運動の上のみに止まらず，君の性格となって，日々の行動の上に，光を放っていた。

君と交りを深くした友人は，その範囲が各方面に亘り，広く且層の厚いものであった。しかもそれ等の数多くの友人が，一様に君を敬愛し，敬慕し，信頼した所以のものは，君が何物にも屈しない純情と，巧まざる誠意とを，常に君の心の奥底に保っていたからに外ならない。ここに集まった先輩，知己，同僚，後輩，皆君を知っている人々である。互いに心と心とが触れ合った親しい友達である。我々は君を失うて誠に淋しい，誠に淋しい，と云う感を，しみじみと味わされたのである。

しかしあの豊かな人なつこい笑を含んだ君の顔と，その心は，いつ迄も，いつ迄も，懐しい思い出の宝庫として，我々の心の中に生きて行き，我々を励して呉れるであろう。

では，左様なら平山君，どうぞ安らかに

友人総代　平井喜久松

（筆者：名誉員　工博　極東鋼弦コンクリート振興KK会長）

平山復二郎君を想う

内海清温

昨年の9月のある日，平山君からいつものとおり電話で“こんどの土曜日はどうだ”と云って来た。ゴルフに行こうということだ。あいにくその日は差し支えるのでそのつぎの土曜日を約した。それなのに，その最初の土曜日に突然入院してしまった。驚いて病院にかけつけて見ると，ちょうど輸血の終ったところであった。どうしたのかと聞くと，このごろゴルフをやったあと疲れるので医者に相談すると，貧血がひどいようだからその原因を調べるために入院をすすめられたのだ。輸血すると二，三日はたいそう具合がいいからこれを続けるのだと常に変わらず楽観的であった。それが意外にも癌であって，あの元気だった平山君が4カ月の闘病もむなしく，ついに逝ってしまった。

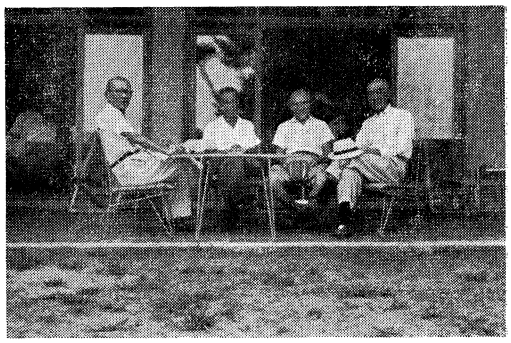
平山君をはじめて知ったのは一高時代である。私が入学した時彼は3年生で野球の主将で名3塁手のきこえ高かった。彼の地を這うような格好で塁を守ってる姿が今でもありありと目に浮ぶが，それよりも深く私に印象づけたのは，まれに見る秀才としての平山君であった。当時は毎学期末，学期試験の成績が成績順に，本館の玄関脇に張り出されたが，平山君はいつもトップグループにいた。のんびりした田舎中学を出て入学して見ると，高等学校の二部甲類（工科）というものは目まぐるしく忙しい。毎日のように数学の宿題が出る，これをやって往かなければ次の時間の講義がわからなくなるから否応なしだ。物理，力学なども講義の聞きっぱなしというわけにゆかない。更に製図というものがあって毎学年何枚かかかされるのに非常に多くの時間を要した。とても一部（法文科）の諸君のように呑気に遊ぶ暇などなかった。従って落第もずいぶん多かった。そんな中にあって平山君は1年から卒業するまで，毎日放課後野球の猛練習をするから夜は相当疲れてるであろうし，勉強する暇などない筈なのにいつも成績は抜群であった。この男は一体どんな頭をしているんだろうと舌を巻いた訳だ。

平山君と交際の始まったのはいつ頃からであったかはっきりしないが，ごく親しくするようになったのは彼が建設局長として東京に落ちつくようになってからで，土木学会などでもよく会い，また故山口　昇君を中心としてその前後の東大卒業生若干名がおりおり会合して時局を論じたり，とくに大学のありかたなどを語り合った。そのうち平山君の従妹が私の義弟と結婚したりして，公私に会う機会が多くなり，いつとはなしに相許すなかとなった。

そのうち平山君が満洲に行くことになった時“君が内地を去ることは僕個人としても心淋しいが，それよりもわが土木界にとって大きな損失だ。満鉄を一期勤めたらサッサと帰って来て欲しい”といったことをハッキリ覚えている。ところが満鉄をやめたと思うと満洲電気化学ついで満洲電業の理事長となり終戦まで帰って来なかった。終戦になると満洲在留邦人の会長におされ，その人たちの生活の世話から引揚げの世話まで全部果して，最後にシラミから伝染するという発疹チブスを背負いこんでようやく帰って来た。当時の在留邦人に親のように慕われ感謝されている。

戦後平山君と最初に初めたのが，国土開発協会であった。これは土木学会はどこまでもアカデミックな学会た

ありし日の平山氏（左端）右へ黒田，平井，山本の各氏
（1961年8月18日，大洗ゴルフ場にて）



らしめ，戦後日本の国土開発という実際問題と取り組みながら土木技術者の大同団結をはかろうという趣旨で出発したが，時あたかもインフレ途上で経済的困難にぶつかり，中堅・若手技術者の共鳴と参加の得られないうちに自滅した。つぎにコンサルタントの育成とその地位向上をめざして生れた技術士会の運営に苦労をともにした。私は劇職についたので遠ざかったが平山君は終始熱情を捧げて指導運営に当り，技術士法の制定に献身的な努力をはらった。もっとも平山君は現行の技術法では満足し得ず，更に前進することに心胆をくだいていたが，この方面でもまことに惜しいリーダーを失った。

本誌の編集子は平山君が科学技術の振興に寄与したことを中心にした想い出を書けという注文であったが，平山君の生涯をかけた技術活動のすべてが科学技術の振興に大きく寄与しているのであって，与えられたこれだけの紙面では到底書き誌し得ないと申すほかない。ただその円満高潔な人格，厚い友情，深く広い学識，高邁な識見，技術に傾けたその情熱，その思想において，その世界観において世の指導者として最高級の存在であった。これがわれわれに残した彼の印象である。

（筆者：名誉員　工博　攻玉社短期大学長，科学技術会議議員）

追　　憶

大　石　重　成

平山さんは学校を出られ直ちに国鉄に入られ，最近迄鉄道の仕事に関係されておられた事は，皆様の御存知の通りであります。御在職中の事は私達には，色々お話に承わっている程度で，ただ偉い方だと思っていた程度しかありませんでした。国鉄から満鉄に行かれ，益々御活躍との事，後輩として遥に尊敬しておりました。私がほんとうに御指導をいただく様になったのは，終戦と共に御帰朝になってからで，最近は何やかやと平山さんに御相談を申し上げておりました。平山さんに公式にお願い致しておりました委員会だけでも，十指に余りある程でした。その中主なものを拾って見ますと都市交通審議委員会，鉄道建設審議会委員，修史委員会，海峡連絡鉄道技術調査委員会，等々でその殆んどが平山さんが委員長として運営されておったのであります。特に私等新幹線工事に，関係している者の忘れる事の出来ない事は，昭和 32 年新幹線調査委員会が発足すると，直ちに委員の一人となられ，技術関係小委員会委員長として殆んど毎日色々と御指導をいただき，特に新東海道線工事の最難関と目されている新丹那トンネル工事に就いては，現丹那トンネルを直接熱海工事事務所長として掘られた時の御体験，又外地に於ける広軌鉄道の御経験等，新幹線工事に必要な資料を殆んど御一人でまとめられ，国鉄としては初めての広軌新幹線着工に踏み切った事は，平山さんのお力であり，国鉄史上永久に忘れる事の出来ない事であります。1 月 19 日朝平山さんが亡くなられたとお知らせを受けた時は，ああ残念な事をした，今後国鉄はどうしたらよいだろう，平山さんに次ぐ先輩がおられるだろうか，沢山の難問題をかかえてどうしたらよいだろうかと全身の力が抜けてしまいそうでした。考えて見ると国鉄は余りにも沢山の仕事をお願いしすぎておりました。後輩の私達も頼りすぎておりました。平山さんの何事にもこだわりのない，毎日毎日進歩しておられる考え方，私達よりも 10 年も 20 年も先輩でありながら，むしろ私共より新しい進歩した適切な新技術に，ただただ甘えおすがりしすぎた私達でした。平山さんの頭は少しも年をとらないので，知らず知らずの中に体の方のお年の事を忘れて無理をお願いしていたのです。今にして思えばまことに申し訳けない事をしてしまいました。随分体に無理をさせてしまった事と思います。私が最後に仕事の事でお目にかかりました時，ブラジルに調査団が派遣されるので，自分も輸送関係の調査で出掛けるが，若し国鉄の方に調査団から相談があったら，年の事は考えない様に又心配しなくてもよい，自分は元気だから行って来るよと，ほんとうにお元気に希望に満ちておられました。その後調査団の方から御相談もあり，平山さんのお話もありまして平山さんは，御老体だけれども決して私共より弱っている様な事はない，むしろ若い者よりお元気だし，第一線の者に勝るとも劣る事はない最適任の方だとおすすめしてしまったのです。その後まもなく御病気になられ手術をなされ，再びもとの様にお元気になられないで悲しい事になってしまいました。平山さんは技術家として理想的な一生を終えられ，数多くの後輩に永遠の理想と，目標を与えて下さいました。国鉄土木技術者は一致協力して平山さんが吾々に与えられた，大仕事新幹線工事を一日も早く完成して，御恩の万分の一に報い同時に御冥福をお祈り致す次第です。

（筆者：正員　工博　国鉄新幹線総局長，常務理事）

満鉄時代の想い出など

久　保　義　光

平山さんが鉄道省から満鉄理事として赴任されたのは昭和 13 年の夏頃のことでした。当時の満鉄は，昭和 6 年 9 月勃発の満洲事変以来活況となった新線建設が最盛期を迎え，毎年 500 km 内外の新線が営業開始しており，